

山間戦線の行方はどこ  
に？

AMEN鬼威惨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中世に突然現れた『ゆつくり』と人間のある県の山を舞台にした虐殺。

# 目次

悪夢を知らせる狼煙

---

1



# 悪夢を知らせる狼煙

人類が中世に突入した時に、全く新しい種が誕生した。

——その名もゆっくり。

饅頭であり、種族ごとに異なる豊富な餡と人語を話せる位しか大した特徴もないこの種は戦後、山を踏破し、資源を荒らすようになった。

生活圏は人類とも重なり、ありふれた害獣の一つとなった。

そんな害獣を除去しようとするある同好会の話

.....

## I 県某所の山

「今回、自治体と企業からの依頼があり、俺らがやるのはこの山での害獣駆除だ、いつものやり方で行こう、良いな？」

リーダー格の男はそう確認を同好会メンバーと有志三百名に取る。

「基本的な戦法を教えてくれるなら有志の私たちは動けます」

余裕しやくしやくで更に喜色満面に口々に有志たちは宣言した。

彼らは農具や行政から認可を受けた威力を向上させたエアガンを持つていた。場合によつては何も持つてすらいもない人も居る。

そしてこれから行われるのは駆除の名前をした虐殺戦である。

.....

そんな虐殺なんて全く知らないゆつくり達は人類に革命を起こすべくエアガンの点検をしていた。

エアガンは愛護団体から得た物である。

革命の為に愛護団体に周辺のゆつくりを掻き集めてもらつたり、

塹壕やトーチカ（土製）の建設をしたり、

一部のゆつくりを人の形に変えてもらつたりして準備をしていた。

愛護団体は駆除される可哀想なゆつくりを助ける為、各所にスパイを送り、事前に事態を察知していた。

察知していたからゆつくりを色々助け、事態を伝えていたが綺麗サツパリ忘れられていた。哀れである。

大つ丈夫だよ！駆除団体なんてドスにかかればノープロブレムだからっ！

これだけ側近達は胸を張つて言っていたのに、、

・ ・ ・ ・ ・  
——かっくめい！かっくめい！だいかっくめい！

山に入って直ぐこんな戯れ言を聞く羽目になって私——相沢はうんざりしていた。

別にゆつくりは嫌いでもない、単純に郷土愛から参加したただだが、羨がなつてないと人の赤ン坊と変わらん。赤ン坊と違って可愛くないか。

今回は親衛隊の装備で来ている。

ヒストリカル鯖ゲーに参加していてその帰りだったからだ。

今は友人を呼んで親衛隊の小隊を編成している。

反り館を顔に付けたくないからガスマスクを着用している。

、お陰でミレニアムのモブ扱いをされている。止めてもろて。

——その人間達は「駆除団体」さんなの？

ガキが、舐めてると潰すぞ( )

ああ、あ見つかつたか、しかも成体ゆつくりまでいやがる。

指示は見つけ次第殺せ、だから仕方ない、人工吸血鬼(笑)の力、試させて貰う！

・ ・ ・ ・ ・

ゆつくり達は全身黒色の服で顔が見えない人物と接触した。

顔が見えないということは遥かに劣る生物だ、というゆつくりらしい論理を導きだし

て、好き勝手言っていたが、

ガスと有機プラスチックの弾が吐き出されていくMP40と

次々と奇声を上げながらのたうち、死んでいく同胞を見て事態を察したゆつくり達は急いで逃げようとした。

だが間に合わなかった、ただの饅頭に次々なつていくのを最後まで見ていたまりさは最期に叫んだ。

「でぎじゆうだよー！、駆除団体が来だよー！」

次の瞬間、走馬灯すら観れずに死んだ。中枢館ごと館を破壊されたからである。こうしてゆつくりと駆除団体の熾烈な（一方的な）戦争が開始された。